



広報てんのり

No. 208

昭和55年

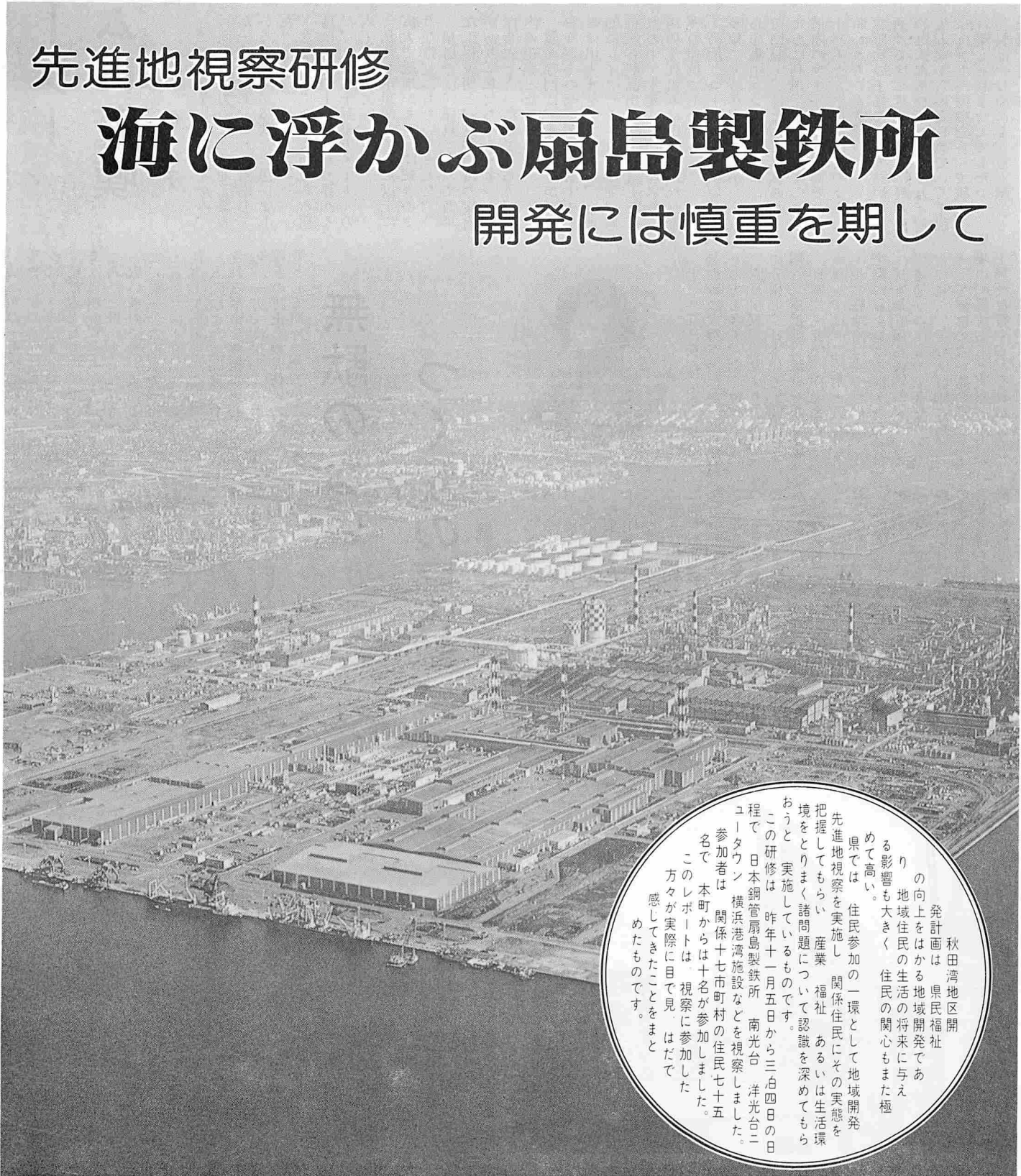
3月25日発行

発行・秋田県天王町役場 電話(018878)2211~4
 編集・企画室 印刷・秋田協同印刷 電話(0188)37477~8

先進地視察研修

海に浮かぶ扇島製鉄所

開発には慎重を期して



秋田湾地区開発計画は、県民福祉の向上をはかる地域開発であり、地域住民の生活の将来に与える影響も大きく、住民の関心もまた極めて高い。

県では、住民参加の一環として地域開発先進地視察を実施し、関係住民にその実態を把握してもらい、産業、福祉、あるいは生活環境をとりまく諸問題について認識を深めてもらうと、実施しているものです。

この研修は、昨年十一月五日から三日四日の日程で、日本钢管扇島製鉄所、南光台、洋光台、ユータウン、横浜港湾施設などを視察しました。

参加者は、関係十七市町村の住民七十五名で、本町からは十名が参加しました。

このレポートは、視察に参加した方々が実際に目で見、感じたことをまとめたものです。

コンピューター システムに驚嘆

山田信子



もこのようなことにかんがみ、行政との協力のもとに地元業者が一致団結し、これに対応していく気構えが必要だと思ひました。

さて、第二の視察地である扇島は、海の上にぽっかり浮かんだ、五百五十万平方メートルの人工島です。

私たちが想像していた以上に広大で緑地があり、陸続きのような錯覚におちいりました。

扇島では、係員によって簡単な工程説明と、見学順路の案内があり、私たちはヘルメットに作業衣といったいでたちで、構内の視察となりました。

製産部門は、十六に分かれており、その全部門を視察することとは出来ませんでした。合理的にレイアウトされた設備、原料から製品出荷まで一貫した流れの中で生産され、管理される精巧な仕組みには、ただただ驚嘆の連続でした。

高炉、コークス炉、転炉から多量にガスが発生するが、それらを集中コントロールセンターで回収し、ほとんど無駄のないように利用、電力化しています。

構内のエネルギーは、需要の九十パーセント以上がこのように賄われています。

圧延の工程では、加熱炉から通ってきた真赤な鋼材が最新式の巨大な機械でロールされ、前後しながら形どられていく工程には誰もが固唾を呑んで眺め、製品を目前にし、最も緊張と感動を覚えました。

私たち、秋田湾地区開発関係十七市町村の視察団一行は、二台のバスに分乗し、一路第一の視察地である洋光台、港南台ニュータウンへと直行しました。

このニュータウンは、開発により、激しい人口増にとまぬ住宅、宅地の不足を緩和し、生活の施設と居住環境作りを目標に計画し、施行されたものです。

将来、わが町も人口増にとまぬ高層ビルが立ち並ぶことと考えられます。商工業において

無駄のない つくりの扇島

眞壁聡



十一月五日夜、秋田駅に集合。参加者は大勢だったが、顔見知りの方も多く、話はずむ。

六日早朝、上野よりバス二台に分乗し、日本住宅公団、日本鋼管、横浜港、鎌倉を視察する。

日本住宅公団、洋光台ニュータウンでは、二〇七・五ヘクタールの整地内に建つ、住宅、社宅群に目を見はるばかりだった。

日本鋼管扇島製鉄所では、まず島造りの作業と工事をフィルムで見て、その大計画に驚く。

そして無駄のない島の形と、工場の配置である。実際、島内の工場を視察するとそれがよくわかる。原料が入港し、工場内に

安を覚えました。現在、契約している請負企業は八十社あまりで、その業種は多種にわたっています。秋田湾地区開発においても、あくまでも地元企業を優先し、本町の発展、繁栄の要となることを切にお願ひします。

最後に他の市町村の方々と、開発によって生ずると思われる公害問題などについて意見交換し、大いに見聞を広める機会に恵まれたことを、県開発局並びに町当局に対し、深く感謝いたします。

はいると流れ作業のように次から次へと動き、製品になって反対の港から出荷するような島の造りだった。工場内には、作業員の姿もまばらで全てが機械による作業だった。

翌七日、横浜港よりフェリーに乗り、扇島付近を回る。思ったより海は汚れてなく、臭いもなかった。この日は晴天で、工業地帯についてまわるスモッグもなく、公害云々ということは考えもつかなかった。

湾のあちこちでは、釣りをしている人の姿も大勢みられ、なおさらその感を深くした。

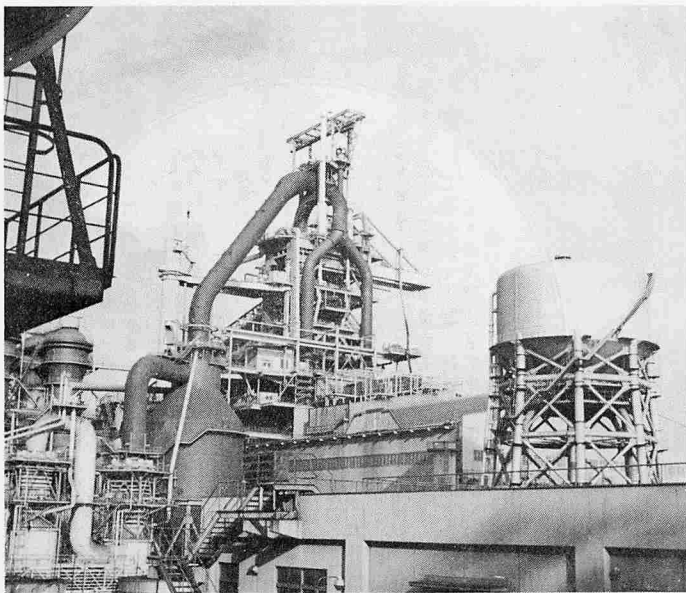
次に鎌倉を見学。史跡、名所をまわった。

京浜工業地帯よりわずかしか離れていない所に、がらり環境の変わった所を見て、少しちぐはぐな気持ちを感じた。そして、働く地域と、住む地域の違いを見つけた思いがした。

▽ 横浜港湾をバックに記念撮影「アレっ3人足りませんナー」



(左から) 伊藤(公)、安田、山田、三浦、木元、桜庭、鈴木



△ 高くそびえたつ高炉 —— 扇島製鉄所の象徴 ——

先進工業地帯を 視察して

藤原 忠博
伊藤 公男



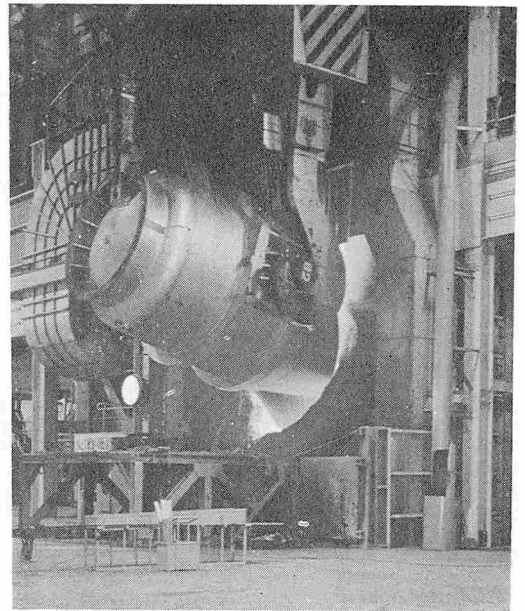
(左から) 藤原忠博氏、伊藤公男氏

そこで秋田湾地区開発が実行され、企業誘致が現実になった場合、県当局が言っているように、地元の労働力を優先的に採用し、出稼ぎのない、また若者の県外流出をくい止めるため云々、というキャッチフレーズには疑問を感じました。それというのも、港南台地区開発では大企業が誘致されたのち、人口が急激に増えたそうです。地元の労働力も多少は採用されたでしょうが、他から多く入ってきたように思われます。

県、町でも熟考していると思うが、地元採用を少しでも多くするために、その時代と職場に適應した専門的技術者の養成が必要だと思えます。職場環境の面では、周囲がほとんどコンクリートで囲まれ、いくら工場といっても、仕事や生活するうえで土と緑が必要ではないでしょうか。

最後に、県と町の言う工業開発の必要性、重要性は十分理解できませんが、現実には秋田は農業県です。将来の展望も大事ですが、私たちの関心には農、漁業に一生懸命努力している若者が大勢います。恵まれた秋田の自然を生かし食糧基地としての秋田を位置づけることも大事なことだと思います。

県や町の農・漁業振興のためそこに生計の糧を得ている私たちとしては、なお一層の努力をお願いいたします。



△ 転 炉

万全な環境保全対策

三 浦 喜 博

日本鋼管は明治四十五年に創立されて以来、逐次業務を拡大し現在では鉄鋼、造船、重工エンジニアリングの機能を持つユニークな総合重工業メーカーとして、わが国の経済発展に寄与しています。

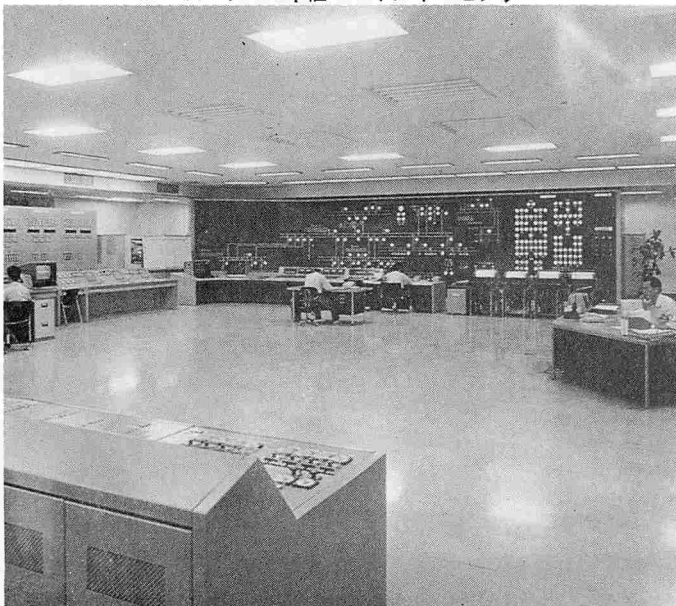
鉄鋼部門は、京浜製鉄所、福山製鉄所を持ち、両製鉄所の年間粗鋼生産能力は二千二百萬トンの規模を誇っています。重工部門は、わが国第六位の実績を持ち、造船部門をはじめ上下水道、ガス塵芥処理施設、橋梁、あるいはエネルギー関連部門などを擁して幅広い分野で活動しているとのことです。

昭和四十四年、相つぐ設備の拡大によるレイアウト上の制約と、設備の朽朽化、あるいは環境保全の要請などに対応して抜本的な工場更新の構想が打ち出

され、おおよそ十年間の歳月と巨額の投資を行い、今日では超近代的な製鉄所に生まれ変わっています。また公害防止についてはあらゆる努力を続け、特に京浜製鉄所は都市近郊の製鉄所として、徹底した環境保全対策に力をそいでいます。その例をみると、硫酸酸化、窒素酸化物については、低カロリーガスを使用、また世界最大の排煙脱硝設備、排煙脱硫設備を設け工場用水は高度の水処理設備で浄化し、何回も循環させ、さらにカスケード利用を行い、何段にも活用され、排水量を大幅に減少させると同時に水資源の無駄をばぶいていきます。

このように秋田湾の開発にあたっては無公害を目ざし、省エネルギーの秋田湾工業地帯に発展していくことができたと思

▽ 省エネルギーの中枢・エネルギーセンター



△ 「ハイポーズ」疲れていてもカメラを向けると、きまりますナ

開発には住民の意見を参考に

木元豊子



先進地視察研修は、十一月五日の夜行列車で秋田を発ち、翌六日に第一の研修地である横浜市に今完成しつつある港南台、洋光台を視察。続いて海に浮かぶ扇島、日本鋼管を訪ずれ、説明と意見交換、現場視察をし、その日の日程を終える。七日は、横浜市内と横浜港内を視察し、次の目的地である鎌倉へと向かい、七日の夜行列車で上野を発つ。このようにして三泊四日の研修は消化され、無事終了した。

研修先の中で感心させられたのは、横浜市の港南台、洋光台の二団地と日本鋼管の事であった。まず、団地の方は、港南台が約二九七ヘクタール、洋光台が二九七ヘクタールの土地の開発を行い、住宅市街地に仕上げた。それを目指しての現実的な歩みを進めている。地区内の計画人口は両方合わせて約八万人で、その中に高校一、中学校五、小学校十一、幼稚園七、保育所二というように、かなり恵まれていようと思える。見わたす限りの団地の峰、道路などは良く整備され、子供達も自由に遊んでおり、そんな点は恵まれているかもしれないが「よくこんな所に人が住んでいられる

なあ。」という感じさえした。地区の方でも、人間関係やその他の事に關しても色々よりよくするための努力をしているとの事であった。

秋田県はまだまだ住宅、宅地不足が大きな問題になるといふ事はないかもしれないが、もしそんな「時」が訪ずれたならばその時は、この団地は良き参考となるかもしれない。しかし、個人的な気持ちから言うならば、そんな「時」は、けっして来てほしくないと思ふ。

次に、海に浮かぶ扇島、日本鋼管は、昭和四十四年の設備の老朽化に伴う規模拡大、更には環境保全の要請などに対応して抜本的な工場更新の構想が打ち出され、超近代的な製鉄所に生まれかわった。例えば近代化される前は、六人で行っていた仕事が一人で足りる、など人員面でもかなりの整理が行われ、それだけコストも安く、成果をあげている。また鉄鋼石から鉄を取った後の残りカスを冷やす際に、発生する蒸気を使って自家発電を行い、雨水までも無駄なく使うなど、全てに無駄が最少限におさえられている。そして見学者のための通路までが作られていて見学していても整然とした感じであった。もし秋田に、製鉄所を作る場合、寒さなどは問題にならないという事であったが、日本鋼管のように徹底したシステムで軌道に乗ってしまふまでの事を思うと、はたしてそこまで行くことができるであろうか、その一抹の不安を

いだいてしまう。今回の研修旅行で秋田湾開発に際して参考になるところは、この二箇所ではなかったかと、私は思っている。しかし、私は感じる事のできなかつた地を感じて来た方もいるであろうし、

規模の大きい

ニュータウン

安田孝一



十一月五日から三泊四日の日程で、秋田湾地区工業開発先進地視察研修が実施され、県内関係十七市町村から約八十七名(本町から十名)が参加、日本住宅公団横浜国際港都、及び日本鋼管の海に浮かぶ製鉄所扇島などを視察しました。

初めに、日本住宅公団が建設中の洋光台、港南台地区の開発を視察しました。目の前に広がる規模の大きさに「大きいなー」と驚嘆。みんなの共通したひとことでした。計画人口三万三千人、戸数が約八千五百戸、小学校四、中学校が二、幼稚園四、保育園が二校、その他の施設など教えあげていると、施設のすばらしさだけでなく規模がわかりました。私は「一団地などではなく、ひとつの町だ。」と思いました。それもそのはず、七年の間に何百ヘクタールという土地を買収し、近代的な団地に開発したのです。

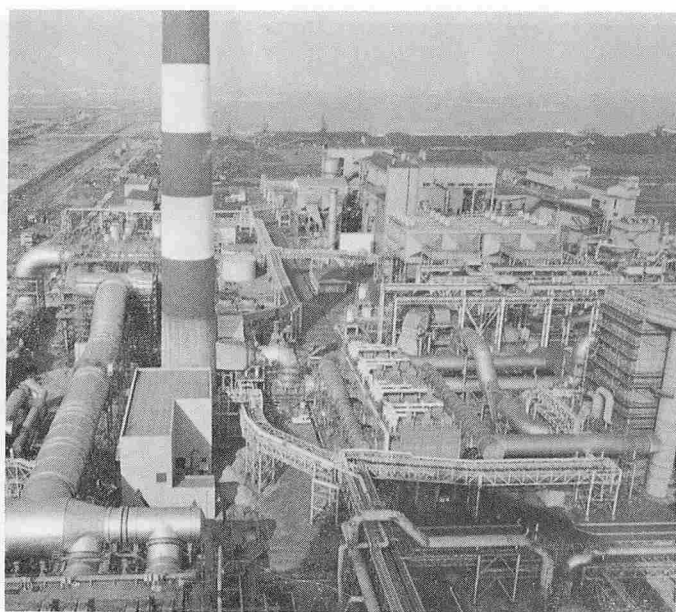
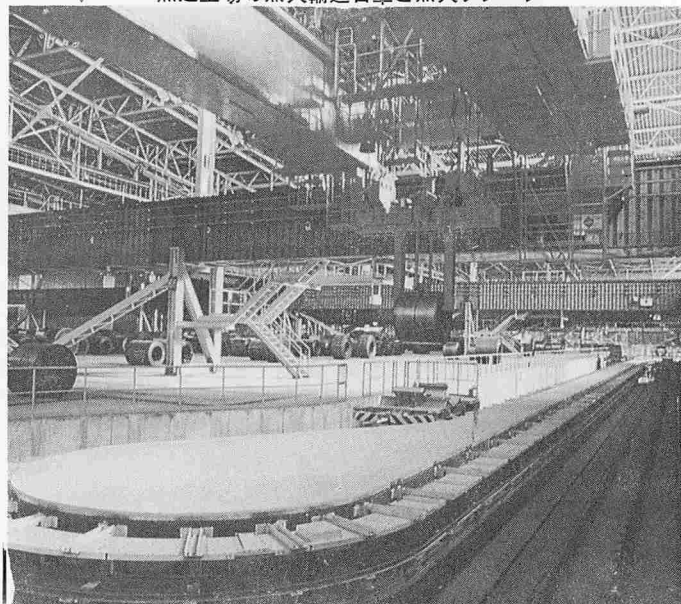
また、このような研修視察は前にも後にも行われていくであろうし、その都度参加者の意見などを参考に、よりよい秋田湾地区の開発、発展がなされることのできたらと思う。

開発前の図面や、説明などを聞き、また驚きました。以前は標高二十メートルから八十八メートルの起伏に富んだ複雑な丘陵地で、無数の深い谷が走っていたといふます。私は改めて開発はすばらしいと感じました。

次に日本鋼管ですが、明治四十五年に創立、昭和四十四年に設備の老朽化、拡大、さらに環境保全など工場更新の構想が打ち出され、巨額の投資を行い、現在の近代的な製鉄所となったわけです。その製鉄所は内陸をさけ、海に進出。すばらしい設備を誇る扇島製鉄所となりました。その近代的な製鉄所をバスで視察、いろいろな作業工程を見ました。

工場内は、無人化されている場所が多く、人がいると思うと修理している人や、管理人です。一番に関心があったのは公害関係です。思っていた以上に環境保全には力を入れており、公害対策費もほう大な金額にのぼるそうです。やはり近代的な設備を誇る扇島製鉄所でも、「公害」という二文字は一番重視されているナリ」と改めて感じました。

▽ 熱延工場の無人輸送台車と無人クレーン



△ 焼結工場の環境設備部(脱硝・集塵・脱流)